

## インターンシップ体験記（言語は日英いずれでも可）

**・インターン開始まで**

OISTでのインターンシップのきっかけは、HWIPのOIST訪問で核酸化学・工学ユニットを見学する機会を得られたことだった。この見学会ではOISTについての全体の説明の後、いくつかのグループに分かれて別々の研究ユニットを見学した。私は核酸化学・工学ユニットが研究しているリボザイムについて興味を持っており、自身の専門研究である微生物の代謝制御に応用できないかと考えていた。そこで見学会の後、ユニットの責任者である横林准教授にお時間をいただき、インターンシップの受け入れについて相談した。OISTは修士の学生を中心に多くのインターンシップ生を受け入れていることから、インターン生の受け入れ環境が整備されており、ラボに空きスペースがある限りはいつでも受け入れ可能であると快諾をいただくことができた。その後は何度かのメールのやり取りで実施期間や研究テーマについて相談し、関連論文を読むことで準備を行った。

**・OISTでの生活・学んだこと**

OISTではまず必須の科目として研究者倫理や遺伝子組換え体の扱い等に関わるWeb講習を受講し、翌日に同時期にインターンを開始する学生9人とともにガイダンスや施設の案内を受けた。インターン開始3日目から研究がスタートし、朝の9時から17時半までをコアタイムとして、毎日実験を行った。OISTの学生やポスドクの出身は非常に多様で、私のインターン先のラボには日本人を始め、エジプト、UK、カザフスタン、インドなど多様な国籍の人々が所属していた。そのためOIST内の公用語は英語であり、日本国内でありながら英語でのコミュニケーションの練習ができる環境だった。また一方で、ラボ内および学生デスクなどには日本人のスタッフも多く在籍し、本当に困った時などに日本語で相談できる人々がいるのは非常に心強かった。ラボでは週に1度所属するメンバーの進捗報告会があり、プレゼンテーションとディスカッションを行った。初めに私の専門研究について紹介した時には、分野が違っても関わらず皆積極的に発表を聞き、活発なディスカッションといくつかの有用な提案をいただくことができた。

また私がインターンに行った時期は1月から3月だったが、この時期の沖縄は本州と比べて格段に暖かく、体調を崩すことなく非常に快適に過ごすことができた。宿泊施設はOIST内にも存在するが、こちらはOIST側が主催しているリサーチインターンシップ生が優先であるため、私は外部の少し離れたところにあるマンスリーマンションに宿泊した。しかし朝晩にOISTから無料のシャトルバスが運行しており、通学に困ることは無かった。

**・OIST外での生活、経験したこと**

OISTでは9:30から17:30までを基本として平日は毎日ラボに通い研究を行った。土日については完全に休みであったため、マンスリーレンタカーを借りて歴史的な土地や自然、博物館などに赴き、沖縄の歴史や自然を勉強した。特に座喜味城跡の建築様式や、離島である宮城島（ンダカチナ浜）の景色は素晴らしく、興味深いと同時にこれらの価値のある文化財、自然の保護についても多くのことを考えさせられた。



座喜味城跡



果報バンタ（ンダカチナ浜）